

日本霊長類学会高島賞の選考について
2016年度日本霊長類学会高島賞選考結果報告

本年度の高島賞に対する1名の応募を受け、2016年5月21日に梶山女学園大学にて高島賞選考委員会を開催した。選考委員5名が出席し、1名が書類による意見提出を行い、五百部渉外担当理事の陪席のもと慎重に審議した。選考委員会では、応募者の対象となる業績を、学会の規定、従来の基準等に照らし合わせて慎重に審議した。その結果、上野将敬氏の業績とその内容が高島賞の選考基準に達しており受賞にふさわしいと判断し、選考委員全員一致で推薦することを決定した。

上野氏の推薦理由は以下の通りである。

【上野将敬（ウエノマサタカ）氏の推薦理由】

対象著作

1. Ueno M, Yamada K, Nakamichi M (2014) The effect of solicitations on grooming exchanges among female Japanese macaques in Katsuyama. *Primates* 55: 81-87.
2. Ueno M, Yamada K, Nakamichi M (2014) Maternal responses to a 1-year-old male offspring with severe injury in a free-ranging group of Japanese macaques. *Primate Research* 30: 157-162.
3. Ueno M, Yamada K, Nakamichi M (2015) Emotional states after grooming interactions in Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *Journal of Comparative Psychology* 129: 394-401.

上野氏は大阪大学大学院修士課程在学中の2009年より8年間にわたって、岡山県真庭市神庭の滝自然公園に生息する勝山ニホンザル集団を対象として個体追跡観察し、霊長類の代表的な社会行動である毛づくろいなどについて新しい知見を明らかにした。選考対象となった論文は、国際学術誌に掲載された英語論文2編と、霊長類研究に掲載された英語論文（短報）1編であり、いずれも共著であるが、データ収集から論文執筆に至るまで、作成の主要な部分は第一著者である上野氏が担っている。うち2編は利他行動である毛づくろいにかかわる論文であり、1編は離乳期を過ぎた子どもに対する母親の親和的行動を扱った論文である。

【毛づくろい関係の論文について】

著作1は、毛づくろい交渉における催促行動の影響について検討した論文である。毛づくろいのペアを、血縁ペア、親密な非血縁ペア、親密でない非血縁ペアの三種類に分類し、それぞれのペアで行なわれる毛づくろい交渉について詳細に分析した。その結果、①ペアの種類によらず、催促行動が行なわれた後は高頻度で毛づくろいが生起していたこと、②血縁ペアと親密な非血縁ペアでは、事前に毛づくろいをしなくても、一方が催促行動をすれば、毛づくろいを受けられることが多いこと、③親密でない非血縁ペアでは、事前に毛

づくろいをしなければ、催促行動をしても毛づくろいを受けにくいことを明らかにした。さらに短期的な毛づくろいの交換のパターンと、1年間にわたる毛づくろいの総量の均等性を検討した結果、血縁ペアと親密な非血縁ペアでは、長期的な均等性が保たれているのに対し、親密でない非血縁ペアでは、催促行動の利用が少ないペアほど均等性が保たれていないことを明らかにした。これらの結果は、毛づくろい交渉における催促行動の機能を明確に示しただけでなく、個体間の親密さと長期的な均等性との関係を明らかにした点で、従来の毛づくろい研究とは一線を画するものであり、高く評価できる。

著作3は、毛づくろいを行なうこと、もしくは受けることによって、個体の不安が低減するかどうかを、スクラッチを不安の指標として分析したものである。毛づくろいのペアを、近接率を用いて親密なペアと親密でないペアに分類し、スクラッチの生起頻度と時間的な変化を分析した。その結果、毛づくろいをする場合には、親密な相手に対して行なう場合のみ、スクラッチの生起頻度が低下した。一方、毛づくろいを受ける場合には、相手の親密さにかかわらず、スクラッチの生起頻度が低下した。この研究結果は、霊長類以外の分類群にも広く見られる現象である毛づくろいの進化をたどる上で、毛づくろいがなぜ起こるかという根源的な問題に対する一つの可能性を示唆しており、高く評価できるものである。また、この研究では、血縁や順位、近接個体の存在といった複数の要因が影響している可能性がある状況下で、線形混合モデルを用いて、親密さのみが影響しているという点を明確に示しており、結果だけでなく、分析手法においても新規性が見られる点も評価できる。

【離乳期を過ぎた子どもに対する母親の親和的行動に関する論文について】

これは事例研究であるが、離乳期を過ぎた子どもが負傷した場合、母親の親和的行動が増加すること、また負傷した子どもからも、ディストレスコールという不満を訴えるときなどに出される特有の音声、頻繁に発せられるようになったことを報告したものである。離乳後の子どもに対する母親の投資については、逸話的な報告をのぞけば、十分な知見が得られていなかったが、この研究では、離乳後であっても、子どもからの要請があれば、母親が親和的行動を頻繁に行なうことを明確に示している点で貴重な報告となっている。また、負傷した子どもと母親のペア一組と、それ以外の子どもと母親のペア二組の行動を、負傷発生の前後で比較しており、偶発的な事象に適切に対応して検証に足る分析を行なっている点も評価された。

以上の3編の論文のうち2編は、いずれも長期間にわたる観察結果を詳細に分析したものであり、数多くの先行研究がなされてきたニホンザルの毛づくろい研究において、さらに新しい切り口で新知見を加えた点は高く評価できるものである。また、3編の論文とも調査方法、分析手法ともに堅実かつ頑健なものである点も評価された。今後もニホンザルの行動学的研究を進展させ、さらに新しい知見を加え続けることが期待できるため、高島賞授与にふさわしいと判断された。

2016年高島賞選考委員会

委員長 室山泰之

(東洋大学経営学部マーケティング学科)